

上を向いて煙突の数を数へると同時に下を見て、  
下層労働者の生活状態を観察せねばならない。  
關一

はじめ

前号に続いて“大大阪”である。今月21日から大阪くらしの今昔館で、大阪市中央公会堂竣工100年記念・特別展「大大阪モダニズム-片岡安の仕事と都市の文化-」が開催される(9月2日まで)。その企画に携わって調査を進めたが、“大大阪”の時代はやはりおもしろい。というか、そもそも本紙で“大大阪”が何か、まだ説明していなかった。

大正末から昭和初期、全国で市町村合併が進む。大阪市も大正14(1925)年4月1日、第二次市域拡張を行った。明治22(1889)年に誕生した大阪市は市長を設置せず、府知事が市長職務を行っていたのを、明治31(1898)年に府から独立する。大正10(1921)年には新庁舎が中之島に建設され、市は飛躍的に成長した。

第二次市域拡張では、面積が東京市を抜いて日本第1位、世界第6位の巨大都市となる。それを「大大阪」と呼ぶ。ただし都市名に「大」を冠した「大〇〇」は、全国で誕生し、昭和6(1931)年、伏見市を合併した“大京都”や、その翌年に東京市が「大東京」になって大阪を抜き返した。他にも「大横浜」「大名古屋」「大神戸」「大札幌」から、規模の小さい「大大津」「大岸和田」などの使用例も確認できる。

「大大阪」が有名なのは、第六代市長・池上四郎(1857~1929)と第七代市長・關一(1873~1935)が推進した都市建設の成功が大きい。御堂筋や日本初の公営地下鉄建設など都市基盤だけではなく、福祉や文化政策にも力を注ぎ、「上を向いて煙突の数を数へると同時に下を見て、下層労働者の生活状態を観察せねばならない」というのは關の有名な言葉である。市民に敬愛され、池上は天王寺公園、關は中央公会堂の前に銅像が建てられている。

行政やマスコミは、巨大都市になれば無条件に明るい未来が到来するようには認識していなかった。大正14年4月1日の「大阪朝日新聞・大大阪記念号」は社説「大大阪の建設」で内容や質の充実が重要と説く。



今も市を見守る池上四郎第六代大阪市長銅像  
天王寺公園



市民に敬愛された關一第七代大阪市長銅像  
大阪市立東洋陶磁美術館前

「都市建設の重点は、主として外形にあつて内容になく、量にあつて、質になかった。(中略)この情態から脱却するために近代都市の建設はその重点を専ら内容と質におき、種々の改良事業、都市的施設を完全にせんとして努力し、わが大阪市のごときも、この点に非常なる苦心を払ひつゝあるがななく思ふやうに進捗せず、市民をして切に焦躁の感を懐かしめつゝある」

そして「斯くて真の大大阪の建設は、寧ろ今後の事業に属する。区域拡大のけふの記念日は大に祝すべきの時であると同時に、大に責任を感じべきの時である。吾人は、旧き市民も、新しき市民も、共に協同一致、市民的自覚と、不断の努力とをもつて、この責任を果すべく精進せんことを切望する」として、新旧市民の協力と努力を求めた。

また、毎日新聞社主催「大大阪記念博覧会」を契機に大阪都市協会が結成され、戦後の『大阪人』につながる都市問題研究誌『大大阪』が刊行される。そこで「我等はここに大大阪主義を提唱する。／＼大大阪が現在日本の最大都市であることは事実である。けれども未だ『我等は大大阪市民なり』として世界に誇るだけの文化都市でもなければ経済都市でもない。我等の前途は遙かである途は遠い」と市民の団結をアピールした。

展覧会では、中央公会堂の実施設計に携わった建築家で、関西工学専修学校(現大阪工業大学)初代校長となり、大阪商工会議所会頭もつとめた片岡安(1876~1946)の業績と、大大阪の時代の多彩な文化や建築を紹介するが、都市基盤の整備のみならず、福祉や社会事業の推進や、大学、美術館、科学館など文化施設を建設した背景には、關市長の名言に象徴される、住みやすい街づくりと世界に誇る文化都市、経済都市建設の理想があったのである。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像」(創元社)など。